2021 05 09 七里教会　　最上 光宏

「母の愛・神の愛」　　マタイ福音書 20:20-28

今日、5 月の第 2 の日曜日は「母の日」です。今でこそ、この母の日は、世界中で祝われる行事になっていますが、この日は、もともとアメリカのヴァージニア州のある小さな教会から始まった催しでした。その教会で長い間日曜学校の先生をしていたアンナ・ジャーヴィスという夫人の記念会を行った時、遺された一人娘が、一束のカーネーションを捧げて、お母さんへの感謝の気持ちを捧げたことが始まりだと言われます。今から 113 年も前のことです。そんな昔の、アメリカの小さな教会で起こったささやかな出来事が、多くの人々の感動を呼んで、その教会だけではなく、アメリカ全土の行事となり、世界中に広まり、日本でも祝われるようになったということは、ほんとうに不思議なことだと思います。

この行事が、このように世界中に広まった背景には、花屋さんやデパートなど、様々な贈り物を扱うお店の商業主義の影響もあったかもしれませんが、それ以上に、世界中のみんな中に、お母さんに対する感謝の気持ちがあって、それをうまく表現できなかったところに、一少女がカーネーションの花に託して、素直にその気持ちを表現したことが、共感を呼び、その輪を広げていった、ということではないかと思います。

それだけ、母親に対する感謝の思いというものは、国境を越えてすべての人の心の底に共通してある思いだと思います。しかし、「母の愛」というものは、近年、非常に多様化していて、人によっては、すなおに「お母さんありがとう」と言えない場合もあるようです。

3 日ほど前、私はたまたま NHK の「クローズアップ現代」を観て、心痛む思いをいたしました。そのテーマは「親を捨ててもいいですか」という題で、親からの虐待を受けて成人になった人たちが、どうしたら自分の母親や父親を受け入れ、老後の面倒を見られるか、という 50 代 60 代の人たちの心の葛藤を描いたものでした。その中には、子供のころに親から受けた深い心の傷のために、親が病気になり、亡くなっても葬儀にすら参列できず、葬儀とその後の後かたずけ一切を業者に委託した人の例が紹介されていました。最近、そのような葬儀の全てを代行をする業者が増えているということでした。また、その番組の中で、子供のころ母親から虐待された 50 代の娘さんが、しばらく親との連絡を絶っていましたが、母親が認知症になり、やむなく介護することになって、幼子のようになってしまったお母さんの介護をすることを通して、過去の虐待の傷を癒され、受け入れることが出来るようになった、という例も紹介されていました。いずれにしても、今日、母への愛や感謝の思いは、人それぞれに違うもので、決して、パターン化して、感謝を強要することは出来ないことを思わされました。

「母の愛」は、たしかに有難く、尊いものですが、しかしそこにも「人間の愛」としての破れや限界があることを認めないわけにはまいりません。

今日の聖書の箇所は、ゼベダイの子ヤコブとヨハネという二人の弟子たちとその母親の記事です。この婦人はマルコによる福音書には、サロメという名で、イエスさまに従って色々と身の回りの世話をした数名の女性たちの一人として記されています。彼女にも、二人の息子の母としての偉大さと、母である故の限界と愚かさがありました。

このヤコブとヨハネは、元々、父ゼベダイと共にガリラヤの漁師でした。あのペトロがイエスさまの弟子になった時、そのそばにいたこの二人も、イエスさまから「わたしに従ってきなさい」と声を掛けられ、舟の中に父親と網を残したまま、イエスさまに従って弟子となったのです。親に何の相談もなく、母親とは会うこともなく、突然「出家」してしまったのです。父ゼベダイも母サロメもどんなに心配したか分かりません。

けれども、母サロメの偉いところは、ただ息子たちのことを心配し、嘆くのではなく、息子たちがそこまで熱心に慕うイエスさまという方はどんな方なのか、どのような教えなのか、少しでも理解したいと思って、自分もまたイエスさまの後を追い、一行の世話をしながら従った、ということです。そこには、息子たちを信頼し、自分も息子たちと共に教えを受け、新しい生き方をしようという前向きな姿勢が見られます。

子供が小さい時には、親は子供を守り、正しく子供を教育し躾ける責任があります。けれども、子供がある程度大きくなり、自分で事の良し悪しを判断できるようになったら、子供を信頼し、その自主性を重んじて、それぞれの生き方を尊重するということが、大切になります。また、親自身も子供に学びつつ、自分自身自立して、共に成長していくという姿勢が求められているのではないでしょうか。その意味で、父親のゼベダイのことはわかりませんが、母親のサロメは賢い女性であった、と思います。

私は、青森県の八戸という町の薬局の長男として生まれ育ち、その薬局の後を継ぐことを期待されていました。しかし、私は、どうしても牧師になりたいという、使命感を与えられて、親の期待を裏切って神学校に行き、この道に進んだわけですが、頑固な父親は「家の後を継がないのなら、親子の縁を切って出て行け」と、なかなか認めてくれませんでした。そういう中で、私の思いを理解し、父親をなだめ、牧師になることを励ましてくれたのは母でした。母は、幼児洗礼を受けてはいましたが、当時教会から遠ざかっていました。私の献身を機に、教会に行くようになり、信仰を告白し、やがて父をも教会に誘って受洗にまで導きました。私はそういう母を尊敬し感謝しています。

たしかに、母の愛は偉大だと思います。しかし、やはり母の愛も、人間の愛としての破れや限界があるということを認めないわけにはいきません。その破れと限界は、このヤコブとヨハネの母、サロメの中にも見られるものです。

このマタイ福音書 20 章 20 節以下の記事は、イエスさまが、これからいよいよエルサレムに上って苦しみを受けるという「受難予告」の直後の箇所です。18 節でイエスさまは、こう語られました。「今、わたしたちはエルサレムへ上っていく。人の子は、祭司長や律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する」。そのとき、ゼベダイの息子たちの母(サロメ)は、その二人の息子(ヤコブとヨハネ)と一緒にイエスさまの所に来て、ひれ伏し、何かを願おうとしたのです(20 節)。イエスさまが、「何が望みか」と問うと、彼女は「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に一人は左に座れるとおっしゃってください」(21 節)と頼んだのです。　サロメは何を勘違いしたのか、イエスさまの苦難と十字架の死の予告を聞いて、イエスさまがいよいよエルサレムで王座に着いて、栄光を受ける時が来たと思ったのです。それは、弟子たちの期待でもありました。「栄光に輝く王としての救い主・メシア」、それが旧約以来続いたユダヤ人たちの期待でした。しかし、イエスさま

が来られたのは、「苦難の僕」として、この世の罪と苦しみ・病を担い、自らの苦難と死によって、罪の赦しと、病と苦しみからの解放をもたらすためでした。

サロメの過ちは、イエスさまを、自分流に都合よく理解し、イエスさまの権限と威光によって、自分の二人の息子たちの出世と栄光を求めたことです。「王座に着いたら、右と左に座れるように、便宜をはかってほしい」と。　イエスさまはこれを聞いて何と答えたでしょうか。「あなた方は自分が何を願っているのか、分かっていない」。

これは、何と厳しい言葉でしょうか。人はだれでも、「自分のことは、他人には分からなくても、自分が一番よく分かっている」と思っているものです。しかし、イエスさまは、「何も分かっていない」と言うのです。イエスさまの栄光を求めているような積りで、自分の息子たちの栄誉を求めているのです。それは、母親自身の栄光にもつながるからです。ここに、母の愛の「愚かさ」があるのではないでしょうか。

私の母も、色々な形で、伝道者となった私を支え励ましてくれましたが、やはり心のどこかで、自分の息子が、世間的に名を挙げて有名になることを願っていたようです。

世に言う「教育ママ」と呼ばれる母親たちの、わが子の教育に対する熱心さも、たしかにわが子に対する「愛」によるものと思われます。けれどもその思いが高じると、子供の成績や、有名校に入学させることばかりに関心が奪われて、肝心な子供の心を理解することが出来ず、その心を傷つけ、豊かな子供の成長を妨げてしまうことがあるのです。

私は、いつもこの記事を読む時、気になるのは、成人して、主イエスの弟子ともなったヤコブとヨハネが、よく黙って母親の後について行き、母親と一緒にイエスさまの前にひれ伏して、こんな厚かましい願いごとをしたものだ、ということです。マルコによる福音書(10:35 以下)によると、これを願い出たのは、母親ではなく、ヤコブとヨハネたち自身となっています。主イエスの右と左に座りたいという願いは、もともと、この息子たちの出世欲から出たものかも知れませんが、いずれにしても大人になった母と子が、一緒になって願い出たことは、親も子も自立しておらず、相互に依存しあっている関係です。強い母親の指導力が二人の息子の自立を妨げているのかもしれません。

この母と二人息子たちの願いは、他の 10 人の弟子たちを怒らせ、彼らの非難を浴びる結果になりました。主イエスの弟子たちは 12 人です。寝食を共にし、苦楽を分かち合ってきた仲なのに、みんなを出し抜いて、自分たちだけの栄誉を求めたのですから当然のことです。　母の愛は、大変強く、麗しい一面を持っていますが、時にその愛は「わが子」だけに向けられ、他者のことが見えなくなってしまうという、偏った狭いものになってしまうという限界を持っていることを認めざるを得ません。

イエスさまは、一同を呼び寄せて言われました。「あなた方も知っているように、異邦人の間では、支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかしあなた方の間では、そうであってはならない。あなた方の中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、一番上になりたい者は、皆の僕になりなさい」。

ここには、この世の支配者、権力の座にある者に対する痛烈な批判が述べられています。彼らは自分の地位や立場を利用して、自分の名声や自分の利益を求めるけれども、国民の命や暮らしのことをどれだけ真剣に考えているのか。彼らの真似をするな、力を振るい、人を支配する者にならずに、僕となって皆に仕えるものになれ、というの

です。ここに親と子のあり方をはじめ、私たちお互いの人間関係の基本的なあり方が示されているのです。「愛」は人の上に立って力を振るったり、支配するものではなく、あるがままの相手を受け入れ、相手に仕え、共に歩むことです。

イエスさまは、「みんなの僕になれ」と言われたあと、こう語られました。「人の子が、仕えられるためではなく、仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」(28 節)と。イエスさまがこの世に来られたのは、偉くなって人の上に立って支配するためではなく、僕となって人々に仕えるためであり、自分の命をもって、多くの人の罪を贖うためだ、と言われたのです。これが、イエス・キリストによって示された「神の愛」なのです。

「愛は惜しみなく奪う」と言った作家がおりました。私たち人間の愛は、どうしても自分中心で、自分のために相手を愛し、相手の価値を奪う、という限界をもっています。しかし、神の愛は、その独り子をさえ惜しまず、私たちのために必要なすべてのものを与えて、仕える愛です。「母の愛」をはじめ、私たちのすべての愛が、神さまの愛によって、さらに深められ、豊かにされて、私たちが心から互いに愛し合い、仕え合って、平和な家庭、そして平和な世界を築くことが出来るように、共に祈り努めたいと願います。　　アーメン